

科目名	日本文学の世界 II			科目コード	1317
開講学科	教職課程	単位数	4	形態	講義
教員名	福井慎二 出口逸平				
授業の目的及びテーマ					
国語科教員に必要な日本近・現代文学史の基本的知識の習得が出来るようにする。					
授業概要					
明治以降の日本の近・現代文学の流れを特に小説を中心にして展望する。文学が直面した課題を文体や表現・方法・テーマなどの面から探っていく。					
授業計画					
<p>第 1 回：文明開化と「文学」の受容 その1 「文学」の語義が明治に大変化を生じたことや、坪内逍遙が虚構性に基づく新しい小説概念を生み出したことを確認する。</p> <p>第 2 回：文明開化と「文学」の受容 その2 明治初期と 10 年代で注目される、新しいヒロイン像を作り出した毒婦物と自由民権思想の宣伝手段としての政治小説を取り上げる。</p> <p>第 3 回：明治中期の小説文体 その1 明治 20 年代には、話し言葉と書き言葉で文法・語彙が異なり、話せても文章の書けない状況を変えて新しい国語を創出する言文一致運動が始まる。『小説神髓』で逍遙が把握していた文学上の言文一致の問題点を確認する。</p> <p>第 4 回：明治中期の小説文体 その2 二葉亭四迷の『浮雲』は、心理描写と言文一致による文体の変化とロシア文学的な余計者の知識人という新しいキャラクターを示した。逍遙の写実主義を継承・深化させたのが尾崎紅葉らの硯友社だ。日清戦争による社会問題を受けて広津柳浪・樋口一葉らの悲惨小説や泉鏡花らの観念小説が生まれる。</p> <p>第 5 回：自然主義文学と漱石・鷗外 その1 明治 30 年代には、自然科学の考え方を応用しようとする世界的潮流を受けて、遺伝と環境に基づいて登場人物の行動を規定するゾライズムに基づく作品群が生まれるが、島崎藤村・田山花袋らの自然主義とは考え方・書き方が異なり、自然主義の理論を確認する。</p> <p>第 6 回：自然主義文学と漱石・鷗外 その2 夏目漱石は近代文学の失った笑いを復権させた独特な写生文や「意識の流れ小説」の先取り、高度な心理小説を実現する。漱石は大正文学・文化を用意したことを確認する。</p> <p>第 7 回：然主義文学と漱石・鷗外 その3 歴史的事実を単なる設定として用いて自由に創作する「歴史離れ」が主流の中で、森鷗外は歴史の自然を尊重して歴史的事実と事実の間を想像力で埋める「歴史其儘」を唱える。鷗外が歴史小説・史伝によって近代文学のあり方を相対化することを確認する。</p> <p>第 8 回：大正文壇の成立 大正前期を代表する白樺派はトルストイの人道主義と純粋な芸術家概念を広め、言文一致を完成するとともに心境小説（私小説）を生む。</p>			<p>第 9 回：マルキシズムとモダニズム その1 大正後期には経済格差の広がりを受けて労働文学・プロレタリア文学が生まれる。マルクス主義の文学理論を確認する。</p> <p>第 10 回：マルキシズムとモダニズム その2 関東大震災（大正 12 年）の社会的混乱を反映して新感覚派は、新しい感覚表現を目指した文体の革新と大衆文学の物語性の導入によって、私小説の招いた文壇の衰退から脱却しようとする。</p> <p>第 11 回：第二次世界大戦と文学 その1 大正時代の末頃から一般化する大衆文学は、講談やチャンバラの時代小説、江戸川乱歩の探偵小説、菊池寛らの通俗小説から成り立つ。大衆文学・プロレタリア文学の隆盛する一方で、私小説中心の既成文壇は、題材の広がりや欠いて魅力を失い危機に陥る。昭和 9 年に政府の弾圧によってプロレタリア文学は解体する。</p> <p>第 12 回：第二次世界大戦と文学 その2 壊滅したプロレタリア作家は、マルクス主義からの訣別を私小説的に描いた転向小説を書くだけでなく、戦時体制に協力する国策文学を書くことで転向を完成させた。</p> <p>第 13 回：戦後文学の展開 戦後文学は、プロレタリア文学運動の再興を目指す雑誌『新日本文学』と、政治に対して文学の優位を説き、実存主義に基づく雑誌『近代文学』の創刊（昭和 21 年）に始まる。昭和 20 年代には既成価値に反逆する無頼派や実存主義的・反政治的な戦後派や第三の新人が登場する。</p> <p>第 14 回：高度成長期とポスト・モダン その1 昭和 30 年代の高度経済成長期では、小説は大衆消費社会のニーズに応えるべく社会派推理小説というジャンルを生む。漫画・アニメや爆発的に普及したテレビなどの映像文化の影響を受け、社会的事件に取材したり、エンターテインメント的要素を取り入れて純文学概念が変容する。</p> <p>第 15 回：高度成長期とポスト・モダン その2 昭和 40 年代には、「政治の季節」のスローガンや二項対立を忌避し、自己の内部に沈潜して現実との関係を感覚的に捉える内向の世代が登場する。昭和 50 年代には、あらゆる原理・原則に対する不信・反発が現れる。村上龍は個人の内面を忌避し、映像的風俗の中にすべてを溶かし込む。村上春樹は、因果関係に基づく心理や主義によって登場人物が行動する近代小説のあり方に反発し、国家と個人・政治と文学、自我などのテーマを大きく変容させ、現在につながる小説の書き方・文体の変化をもたらす。</p>		
テキスト	安藤宏『日本近代小説史』中央公論新社			参考文献	
評価方法：					
通信授業は提出課題（2 件）を以って評価する					